

資源添加率向上技術開発研究(クルマエビ)

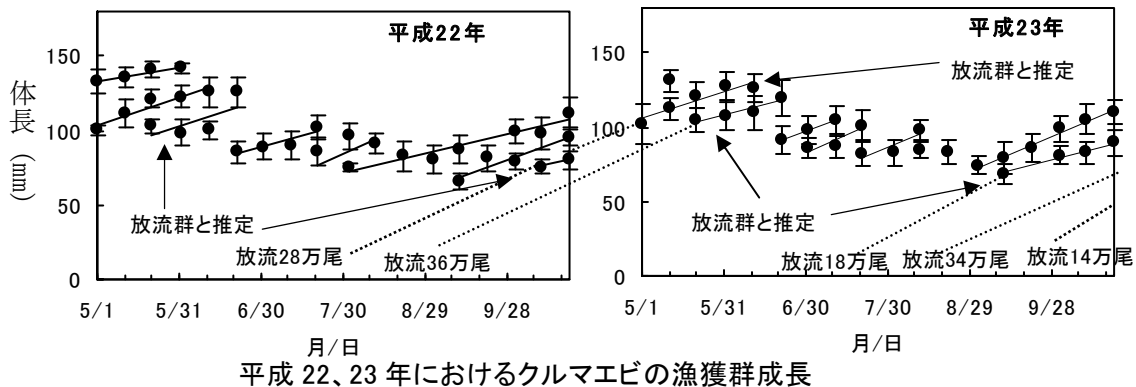
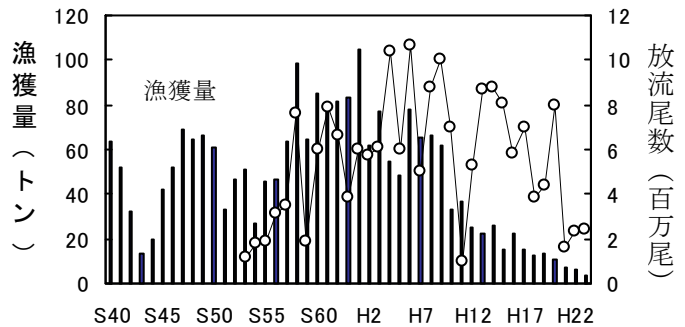
(予算区分：県単 研究期間：平成 20～26 年度)

担当：水産技術研究所 浜名湖分場 山内 悟

【研究の背景とねらい】

浜名湖の重要資源であるクルマエビを増やすため、種苗放流が積極的に行われています。その結果、大量放流以前(昭和 40～54 年)の平均漁獲量 47 トンが、大量放流後(昭和 55～平成 9 年)には 67 トンにまで増加しました。しかし、平成 10 年以降は激減し、過去 10 年間の平均は 13 トンにとどまっています。この減少の原因究明と資源増大方法を検討し、漁獲量の増大を目指します。

湖内クルマエビ水揚げ量の経年変化



【これまでに得られた成果】

(平成 22 年度までの成果)

- ・近年の月別漁獲量は、好漁期(昭和 55～平成 9 年)と同様に放流エビが主体となる 6 月にピークがありました。このことから、放流効果はなくなっていないと考えられました。
- ・平成 20 年放流群の平成 21 年における漁獲割合は同年の漁獲量の 8 %と推定されました。

(平成 23 年度の成果)

- ・市場において経時的に漁獲物の体長測定を行い、天然群と放流群を分離しました。その結果、平成 22、23 年の放流群は平成 23 年の漁獲量の 36 %と推定されました。
- ・天然稚エビの加入量を定期的に調査しました。その結果、5 月上旬から 9 月下旬の間、長期間にわたって加入していることがわかりました。

【期待される成果】

- ・漁獲量減少の原因が把握できます。また、種苗放流の効果も算出できます。さらに、天然資源の状態や浜名湖の環境の変化に応じた資源量増大手法の開発が期待されます。

【今後の計画】

- ・経時的な漁獲物調査(平成 20～26 年度)
従来手法により群分析により放流と天然エビの判別を行い、放流効果を調査します。
- ・天然エビの加入量調査(平成 21～26 年度)
浜名湖にどの程度天然エビが加入しているかを調べ、天然資源の状態を把握します。
- ・DNA 標識による放流効果調査(平成 23～26 年度)
種苗生産した稚エビの母子関係を DNA 解析手法により確立し、放流効果を調査します。

(作成 平成 24 年 4 月 1 日)